

医事・文談

(九百四十)

平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その228
子規と夏目漱石(三十七たび続)

前号に載せた明治24年11月10日発の書簡が、長文だということを紹介した。しかしその3日前の11月7日発の超々長文には、誰しも眼を瞠ると思う。但し、この文の発信者は金之助様であり、受信者も常規殿とあって、お互いにフザケタ自称や他称を用いている訳ではないので、引用を控えていたのであるが、こんな長文を往復している子規・漱石両人の間柄は、果たして何と形容すべきであろうと考えると、やはり紹介すべきだと思ふ。この書簡も、漱石は自宅から、常盤会寄宿舎の子規に宛てたものである。仮に学校で顔を合わせても、こんな長大な議論をする訳にはいかなかったであろうし、どちらかの住居で話し込んで長時間を要するだろうし、やはり手紙が一番便利だったものと思ふ。

まずその長さを測ろう。岩波文庫で、11ページ5行、総行数は14×11+5=159行。1行40字詰。総字数は六千三百余字。これを巻紙に一行十字前後を書くとするれば、実に六百三十行にも及ぶのである。これが11月10日発の書簡に「僕が二銭郵券四枚張の長談義を聞き流しにする大兄にあらずと存じをり候処、案の如く二枚張の御返札にあらずかり、金高よりいへば半口たらぬ心地すれど芳墨の真価は百枚の黄白にも優り嬉しく披見仕候」とあるものである。

当時、封書一通二銭のところ、重量超過で八銭もの郵券を張った書簡がこれである。その返信として子規も四銭の切手を張ったものを差出したのである。

それではこの超々長文の書簡は、なにを記したものであろう。それは一に子規が「明治豪傑譚」と「気節論」とを漱石に贈ったことによる。それらを一読し、漱石が猛然と反駁を加えたのが本書簡である。この二書とも、子規の自著ではない。超々長文のなから、いくつかの箇條を抜き書

きしてみよう。

「さて巻を掩ふてこれらの人物が、小生の心緒を攪動せしやと諦観仕候へば、寸毫も高尚だの優美だのと申す方向に導きし点無之、人をして嘔吐を催ふせしむる件りも有之やに見受られ候。二編中の人間皆気節なきグータラのみと申す次第には無之、中には仰の如き、稜々たる風骨を具したる人も有之べく二人の気節の有無はその人の前後を通観せず候ては、その人の行為がその人の主義と並行するや否や判じ難き」この編に記載の件りはその人の気節を断定するの材料には為し難き。

「豪傑譚」中の事件を大別すると、第一は即座の頓智、第二はその場の激情、更に誰にもある失策話や、尋常一様の世間話の三種に大別される。

「即座の頓智といふ事は、その人天稟の賦性に於て、能もあり不能もあり、頓智あるがために気節あり、頓智なきがために気節なしとは誰も許さぬ事なるべし。否、気節を尊む人は場合に依れば出る頓智もわざわざ引き込ます事あり。」

「第二に一時の激昂にて感情的に為したる事が気節を表顕すといふも受取りがたし。気節とは前にもいふが如く(余の考へにては)、一定断乎の主義を抱懐して動かざるに外ならず。」

「第三種に属する失策話(逸話にせよ)は吾人の生活中、日々眼前に横たはるものとせば、僕などは風骨稜々の冠を戴くを得べし。とにかく失策は豪傑に限りて多きにあらず。また気節あるがために大なるにあらず。」

「御存じの如く、人間の能力は智、情、意の三者に外ならず。気節は人間能力の一部なる以上は三者の中、何れにか属せざるべからず」として、気節が情にあらず、意にあらず、気節は智の範囲内にあることを縷々論ずる。

「小生元来大兄を以て吾が朋友中一見識を有し、自己の定見に由つて人生の航路に舵をとるものと信じ居り候。」その信じきりたる朋友がかかると小供だましの小冊子を以て気節の根本にせよとて、わざわざ惠投せられたるは、その意を得ずと書く。

(表紙写真)

バナナの木の花

札幌市医師会 今村 孝

この木は北海道医師会館前的大通公園の北側の植木の中にあります。

西6丁目から8丁目あたりにかけて3本あります。ちょうど北海道神宮祭典のころに多数の可憐な花(写真)をつけます。バラの花位の大

きさの黄色い花を大きな木一杯につけるのですが、意外に目立たないので注意して見てください。最近、市で木に名札をつけたのですが見つかるとおもいます。

撮影：デジタルカメラ